

41795

教科書文庫

4
810
41-1944
20000 41406

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

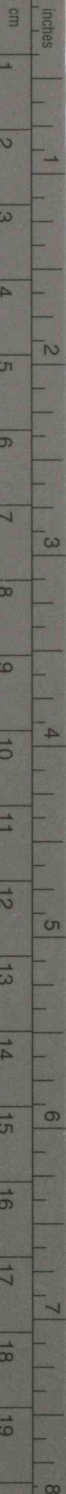


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1944
2000041406

中等國文 二

文部省

(11)



教科書文庫

4

810

41-1944

2000041406

資料室

3259  
M014

中等國文二

文部省

広島大学図書

2000041406



(11)

目 録

一 わたつみ……………四

二 秋から春へ……………六

三 一門の花……………十二

四 すゝきの穂……………十九

五 湖畔の冬……………二十二

六 大君のへに……………三十三

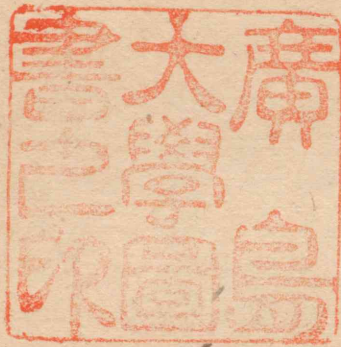
七 眞賢木……………四十三

八 七 風……………四十五

九 馴鹿橇……………五十六

十 創始者の苦心……………六十六

十一 尊徳先生の幼時……………七十二



一 わたつみ

萬葉集

中大兄皇子の御歌

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこそ

額田王の歌

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出でな

柿本朝臣麻呂の羈旅の歌

ともしびの明石大門に入らむ日やこぎわかれなむ家のあたり見ず



高市連黒人の羈旅の歌

旅にしてもものこほしきに山下の赤のそほ船沖にこぐ見ゆ

作者不詳の歌

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てるしら雲

相坂をうち出て見れば近江の海白木綿花に浪立ちわたる

大葉山霞たなびきさ夜ふけてわが船泊ても泊り知らずも

珠洲郡より船出して太沼郡に還りし時長濱の浦に泊てて月光を仰ぎ見て作れる歌 大伴宿禰家持

珠洲スズの海に朝びらきして、こぎくれば長濱の浦に月照りにけり

筑紫つくしに遣つさるゝ防人さきもりの歌

丈部はせうぶ造人の麻呂まろ

大君のみことかしくみ磯いそに觸ふり海原うみはらわたる父母をおきて

二 秋から春へ

大海の日の出

枕をうごかす濤聲うしなに夢を破られ起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉場所はつあけばしは銚子ちうしの水明樓みずあかりにして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過ぎにもやあらん海上なほほの暗く、波の音のみ高し。

東の空を望めば、地平線に沿うてくすぶりたる樺色かばいろの横たはるあり。上りては濃き藍色の空となり、こゝに一痕の弦月げんげつありて、黄金の弓を掛く。光さやかにして、さながら東瀛とうえいを鎮するに似たり。左手ひだりてに黒くさし出でたるは、犬吠岬いぬばさきなり。岬端の燈臺とうだいには回轉燈ありて、陸より海にかけ、頻りに白光の環くわんを描きぬ。

暫くするほどに、曉風あけかぜ冷々として青黒き海原を掃はらひ來たり、夜の衣は東より次第しだいに剝はけて、蒼白あざしろき曉の波を踏みて、こなたへこなたへと近寄るさまも指點しちてんすべく、磯の黒きに波白く打ちかゝるさまも、漸く明らかになり來たりぬ。目を上ぐれば、黄金の弓と見し月もいつか白銀しろがねの弓と變り、くすぶりて見えし東の空も次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々もりもりたる海原に立つ波の腹は黒うして背は蒼白あざしろく、夜の夢はなほ海の上にさまよへど、東の空既にまぶたを開

きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

既にして曙光は花の開くが如く、圈波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水いよよ白く、東の空益々黄ばみ弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果てはありとも見えなくなりぬ。この時、日の使とも覺しき渡り鳥の一行鳴きつれて海原をかすめて過ぐれば、大瀛の波といふ波は悉く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのささめき——聲なきの聲四方に満つ。

五分過ぎ——十分過ぎぬ。東の空見る——金光さし來たり、忽然として猩紅の一點海端に浮かび出でぬ。すはや日出でぬと思ふ間もなし。息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が手もてささぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残りなく水を離れつ。水を離るゝその時遅く、萬斛

の金たらくと昇る日より滴りて、萬里一瞬、こなたをさして長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に、忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。

寒星

寒星一天、深黒なる屋根の上、深黒なる山の上、到る所として星ならざるはなし。葉落ちたる櫛の梢、大なる箒の如く空を摩して、枝星を帯びたり。靜かに中庭に立てば、山頂のあたり、波濤の如く夜嵐の過ぐるを聞く。殷々として遠雷の如きは、隣家、夜靱を磨るなり。

寒月

夜九時、戸を開けば、寒月晝の如し。風は葉もなき萬樹を振るひて、飄々、颯々、霜を含める空に搖動し、地上の影、木と共に搖動す。そ

ここゝに落ち散る木の葉、月光にひらめいて、さく／＼、玉屑を踏む思ひあり。

仰ぎ見れば、高空雲なく、寒光千萬里。天風吹いて、海鳴り、山騒ぎ、乾坤皆悲壯の鳴をなす。耳をそばだつれば、寒蛩籬下に鳴きて、聲絶えんとす。風に向かひて、月色霜の如き往還を行く人の履齒、憂然として金石の響きをなすを聞かずや。月下に狂ふ湘海のかなたに、夜目にも富士の白くさやかに立てるを見ずや。

月は照りに照り、木枯はいや吹きに吹く。大地ほえ、大海たけり、浩々又浩々たり。

大いなるかな自然の節奏。この月とこの風と、殆ど予をして眠る能はざらしむ。

彼岸

今日彼岸に入る。

梅花歴亂として、麥綠既に莖をなしぬ。菜花、盛りとなり、椿はほたりほたり落ち、て地も紅なり。

野に出づれば、田の畔は、つくし、芹なづな、よめな、野蒜蓬など、ぞくぞくとして足を入るべき所もなし。藁は花となりて、露も小さき青傘をかざしそめぬ。その陰には、にかめる、堇の何ぞ美しき。たんぼは、小さき日をば惜しげもなく、田の畔に撒き散らせり。木瓜も紅唇を開きぬ。

田川の水の音を聞け。溶々としてなめらかに、そのうちに無限の春あり。おたまじやくし生まれ、五分ばかり、始めてぬるき水に泳げり。農夫は既に田をかへし始めんとす。

川べには、枯れ葉、舊根の間より、茅花には、大に、竹の子には、細き蘆

の芽の數限りもなく茜色あかねいろにふき出でぬ。

野には雲雀いばらを聞き、わが隣家の櫓やぐらには、近來日ごとに鶯來鳴うぐいすけり。

(徳富健次郎ノ文ニ據ル)

三 一門の花

平家物語

故郷の花

薩摩守忠度さつまのかみ ちのりはいづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に、ひた胃七騎取つて返し、五條の三位俊成卿の許におはしてみ給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人おちうど歸り來たれり」とて、その内騒ぎあへり。薩摩守、急ぎ馬よりとんで下り、みづから高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が參つて候。たとひ門をば開けられずとも、このきはまで立ち寄らせ給へ。申すべき事の候」と申されたりければ、俊成卿「その人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せ」とて、門を開けて對面ありけり。事の體、何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、「先年申し承りてより後は、ゆめ／＼疎略を存ぜずとは申しながら、この二、三箇年は京都の騒ぎ、國々の亂れ出で來、あまつさへ當家の身の上に罷り成りて候へば、常に參り寄ること候はず。一門の運命、今日はや盡き果て候。それにつき候うては、撰集の御沙汰あるべき由承りて候ひしほどに、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の亂れ出で來て、その沙汰なく候條、唯、一身の歎きと存じ候。この後、世鎮まつて、撰集の御沙汰候はば、これに候卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の陰にてもうれしと存じ候は



ば、遠き御守りとこそなりまゐらせ候はんずれ。とて、日頃詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける巻物を、今はとて打ち立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合はせより取り出でて、俊成卿に奉らる。三位これを開きて見給ひて、かゝる忘れ形見どもを賜はり候上は、ゆめく疎略を存ずまじう候。さても唯今の御渡りこそ、情も深う、あはれも殊にすぐれて、感涙抑へがたうこそ候へ。とのたまへば、薩摩守、屍を野山に曝さば、曝せ、憂き名を西海の波に流さば流せ、今は憂き世に思ひおく事なし。さらば暇申す。とて、馬に打ち乗り、冑の緒を締め、て西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後を遙かに見送りて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、「前途程遠し、思ひを鴈山の夕べの雲に馳す。」と高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいとゞあはれに覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世鎮まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、言ひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の巻物の中に、さりぬべき歌幾らもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字をば顯されず、故郷の花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、讀み人知らずとて入れられたる。

さゝ浪や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな

青山の琵琶

修理大夫經盛の嫡子、皇后宮亮經正は、幼少の時より、仁和寺の御室の御所に童形にてさぶらはれしかば、かゝる忽劇の中にも、君の御名残りきつと思ひ出でまゐらせ、侍五、六騎召し具して仁和寺殿へ馳せ参り、急ぎ馬よりとんで下り、門をたゝかせ、申し入れられけ

るは、二門の運命、今日既に盡き果て候ひぬ。憂き世に思ひおく事  
としては、唯、君の御名残りばかりなり。八歳の年この御所へ参り始  
め候うて、十三で元服仕り候ひしまでは、いさゝか相いたはる事の  
候はんよりほかは、あからさまに御前を立ち去ることも候はず。  
今日既に西海千里の波路に赴き候へば、またいづれの日、いづれの  
時、必ず立ち歸るべしとも覺えぬことこそくちをしう候へ。いま  
一度御前へ参つて、君をも見まゐらせたう存じ候へども、甲冑をよ  
ろひ、弓箭を帶して、あらぬさまなるよそひに罷り成つて候へば、は  
ばかり存じ候。と申されければ、御室あはれに思し召して、唯、その姿  
を改めずして参れ。とこそ仰せけれ。

經正その日は、紫地の錦の直垂に萌黄匂ひの鎧着て、長覆輪の太  
刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓脇に挟み、冑をば  
脱いで高紐にかけ、御前の御坪に畏まる。御室やがて御出あつて、  
御簾高く揚げさせ、これへ、これへ。と召されければ、經正、大床へこそ  
参られけれ。供にさぶらふ藤兵衛有教を召す。赤地の錦の袋に  
入れたりける御琵琶を持つて参りたり。經正これを取り次いで、  
御前に差し置き、申されけるは、先年下し預つて候ひし青山持たせ  
て参つて候。名残りは盡きず存じ候へども、さしものわが朝の重  
寶を、田舎の塵になさんことのくちをしう候へば、まゐらせおき候。  
もし、不思議に運命開けて、都へ立ち歸ること候はば、その時こそ  
重ねて下し預り候はめ。と申されたりければ、御室あはれに思し召  
して、一首の御詠を遊ばいてぞ下されける。

あかずして別るゝ君が名残りをば後のかたみにつゝみて  
ぞおく

經正、御硯下されて、

吳竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうち

かな

さて、經正御前を罷り出でられけるに、數輩の童形出世者坊官侍僧に至るまで、經正の名残りを惜しみ、袂にすがり、涙を流し、袖を濡さぬはなかりけり。中にも經正幼少の時、小師でおはせし大納言法印行慶と申ししは、葉室大納言光頼卿の御子なり。餘りに名残りを惜しみまゐらせて、桂川の端まで打ち送り、それより暇乞うて歸られけるが、法印泣くく、かうぞ思ひ續け給ふ。

あはれなり老木若木も山さくらおくれさきだち花はのこ  
らじ

經正の返事に、

旅ごろも夜なく、袖をかたしきておもへばわれは遠く行  
きなむ

さて、卷いて持たせられたりける赤旗、さつと差し上げたれば、あそここゝに控へて待ち奉る侍ども、あはやとて馳せ集り、その勢百騎ばかり鞭を上げ、駒を早めて落ち行きけり。

四 すゝきの穂

良

寛

秋の日に光りかゞやくすゝきの穂こゝの高屋にのぼりて見れば

さとべには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松の音  
しつ

飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も今日も雪の  
降れゝば  
むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを  
見れば

大隈言道

菜花

ふく風に動く菜の花おともなく岡べ静けき朝ぼらけ  
かな

雨晴

かささせるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨のは  
れがた

飛び魚

おのがひれ翼をなして飛び魚の沖のせこしに過ぐる  
ひとむれ

平賀元義

天保十一年九月六日

吉備津彦神の社の秋の葉はいやますくに色濃くな  
りぬ

美作國香美山にて

鏡山雪に朝日の照るを見てあなおもしろと歌ひける  
かも

文政十年十月十九日父の失せられぬるを同二十二  
日夜に来て葬る 父の常に足冷ゆと言はせしを思  
ひ出でて

上山は山風さむしちゝのみの父のみこと足冷ゆら  
むか

嘉永七年正月一日この春は亞墨利加の賊來るよし  
女童どものいひ騒ぐをきゝて

えみしらを討ち平げて勝鬨の聲あげそめむ春は來に  
けり

### 五 湖畔の冬

富士火山脈が信濃にはいつて八が嶽となり、蓼科山となり、霧が  
峯となり、その末端が大小の丘陵となつて諏訪湖へ落ちる。その  
傾斜の最も低い所に私の村落がある。傾斜地であるから、家々石  
垣を築き、僅かに地をならして宅地とする。最高所の家は丘陵の

上にあり、最低所の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜面に百戸足らず  
の民家が散在してゐる。家は茅葺きか板葺きである。日用品小  
賣店が今年まで二戸あつたが、最近三戸にふえた。その他は皆農  
家である。

山から丘陵へ、丘陵から村落へと續く木立が多く、落葉樹である  
から、冬に入ると、傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から反射す  
る夕日の光がこの村落を明かるく寒くする。寒さがおひくゝに  
加つて、十二月の末になると、湖水が全く結氷するのである。

湖水といつても、海面から二千五百尺の高所にあり、村落は湖水  
よりもなほ高い丘上にあるから、嚴冬の寒さは非常である。朝戸  
外に出るとひげの凍るのはもちろんであるが、時によると、上下睫  
の凍着を覺えることすらある。かういふ時は、顔の皮膚面に響き

且つ裂けるが如き寒さを感じる。

この頃になると、湖水の水は一尺から二尺近くの厚さに達する。それほどの寒さにあつても、人々は家の内に籠つて、炬燵たこに暖を取つてゐることを許されない。晝は氷上に出て漁獵をする人々があり、夜は氷を切つて、氷庫に運ぶ人々がある。氷庫といふのは、程近い町に建てられてある湖水貯藏の倉庫である。

この頃、私の村では、毎朝未明から、かあんかあんといふ響きが湖水の方から聞えて来る。これは、人々が氷の上へ出て、「たゝき」といふ漁獵をするのである。長柄の木槌で氷を叩きながら、十數人の男が、一列横隊を作つて向かふへ進む。槌の響きで湖底の魚が前方へ逃げるのをだんく追ひつめて、あらかじめ張つてある網にかゝらせるのが、「たゝき」の漁法である。私の家は村の最高所にあ

る。庭下の坂が直ぐ湖水に落ちてゐるのであるから、一列の人々を見るには、かなり俯し目にならねばならぬ。俯し目になつた視線が氷上の人まで達する距離は、かなりあるのであるが、氷上の人々の槌を振るふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌先が視覚に達する時、槌の音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振り上げる頃に、漸く槌音が聞える。それで、槌の運動と音とが交錯して目と耳へ來るのである。目に來るものも耳に來るものも、微に徹して明瞭である。單にそればかりではない、一列の人々の話し聲までも手に取るやうに聞える。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜であるからである。

村の人々は、又、氷の上へ出て「やつか」で魚を捕る。諏訪湖の底は淺くて藻草が多い。人々は夏の土用中にたくさんの小石を舟に

積んで行つて、この藻草の中へ投げ入れておく。土用の日光に當つた石は寒中の水にあつても、おのづから暖かみが保たれると信ぜられてゐるのであつて、實際凍氷の頃になると、魚族が多くこの積み石の間に潛むのである。それを捕らへるのが「やつか」の漁法である。「やつか」の所在は「やつか」を置いた漁人にあつては、いつでも明瞭である。氷の上に立つて、湖水の四周から嘗つて記憶に留めておいた四箇の目標地點を求めれば足りるのである。二箇づつ相對する地點を連ねる二直線は、必ずこの「やつか」の上で交叉することを知つてゐるからである。交叉の地點を中心として、半径四五尺ぐらゐの圓を畫して氷を切り取れば、その下に必ず「やつか」の石群がある。圓の面が定まれば、その圓周に沿つて竹箒がふるされる。魚の逃げ去るのを防ぐのである。かやうにしてから、湖

底に積まれた石は「まん」のんがと稱する柄の長い四つの齒の鍬によつて、一つづつ氷の上へ掬ひ出されるのである。掬ひ出された石は濡れてゐるといふよりも凍つてゐるといふ方が適當である。水面を離れる石が氷上に置かれる頃は、もうから／＼に凍つてゐるからである。凍つた石が黒山をなして氷の上に積み上げられる頃は、「やつか」の底には青藻と共に揺れ動いてゐる魚族がある。日がさせば、水底に群がり光る魚の腹が見える。魚族は逃げ場を失つて、竹箒に突き當る。竹箒にはとどころに魚を捕らへるための「うけ」といふ物が備へつけてある。これは、一旦これにはいつた魚の二度と外へ出られぬやうになつてゐる竹籠であつて、魚族の多くはこの「うけ」の中へはいつてしまふのである。

朝早く氷上に立つてから「うけ」の中へ魚が納るまでには、短い冬

の日は一ぱいに用ひられるのであつて、竹箆を上げて魚を魚籃の中へ捕り入れる頃は、日はもう湖水の向かふの山へ傾いてゐるのである。湖面を吹く風は、障る物なき氷上を一押しに押して来る。「まんのんが」を持つ手は、時々感覺を失はんとするまでにこゞえる。その時には、携へた火鍋の中で用意の櫛木を焚くのである。或は又、氷の上で直接に藁火を焚くことがある。氷の上で焚き火をしても、その氷が融けてしまはぬほどに氷が厚いのである。おほよそ周圍四里半の氷上にあつて、漁人の生活は全く世の中との交渉を杜絶する。唯、日に一度、辨當をさげて漁場に運んで来る妻女の姿が氷上に現れる。氷を滑り、鴨を追つて遊ぶ子供の群が、漁獵の多寡を見るために、この「やつか」へ立ち寄り、寄ることもある。さういふことが、單調な漁人の生活に僅少の色彩を興へる。

「たゝき」で捕つた魚も、「やつか」で捕つた魚も、いはゆる氷魚であつて、脂がのり肉がしまつて、甚だ佳味である。

氷切りの作業は、快晴の夜を選んで行なはれる。温度が低下して氷の硬度が増すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。若者は宵の口から、藁製の雪沓を穿き、その下に「かつちき」を着けて湖上へ出かける。綿入れを何枚も重ねた上に厚い半纏をまとふので、からだはいはゆる着ぶくれになる。横も縦も同じに見えるといふ姿である。かういふいでたちをした若者が、氷の上に一列に並んで、鋸で氷を挽き始める。氷を挽く手もとは、初め暗くて後に明かるい。目が氷に慣れるのである。三尺四方ほどの大きさに挽き離される氷の各片が、切り離されると共に、水中に陥る。それが氷鋏と稱する大きな鋏で挟み上げられ



る。挟み上げられたあとの水には、星が映つて揺れてゐる。一望平坦な氷原にあつて、空は手の届くやうに低く感ぜられ、星は降るやうに光り満ちてゐる。星の光は、水にあつて水の明かりとなり、氷にあつて氷の明かりとなり、その明かりに慣れるにつれて、隣りの人の顔まで明瞭に見えるやうになる。夜が漸く更けて寒さが益加ると、氷原のところどころに龜裂の音が起る。その音は、氷原を越えて四周の陸地、山地にまで響き渡る。その響きの中に立つて、鋸を挽いてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、その汗が背に凍り着くのを覚える。さういふ時は鋸の手を休めないやうにするのが、唯一の防寒手段になるのである。それ故、若者は唯せつせと切る。腕が疲れると、歌も出ない。唯時々ねむけざましに、大きな聲を張り揚げる者もあるが、それも長くは

續かない。餘り疲れて寒くなれば、氷の上で焚き火をして、一時の暖を取ることもある。かやうにして、夜が白んで來ると、氷の上に積まれた氷板が、山のやうに重なつてゐるのである。夜明けからそれを運んで湖岸のたんぼに積み上げる。たんぼには連夜切り上げられた氷板が、長い距離に互つて正しく積み並べられて、恰も氷の壘壁を築いたやうな觀を呈する。積まれた氷には多く、筵類を引きかぶせておくのであるが、覆ひの筵がなくとも、白晝の日光で、氷の融けるといふやうなことはない。海拔二千五百尺の地が、いかに寒いかといふことは、これで想像し得るであらう。若者は氷を積んでから、疲れたからだを各の家に運ぶ。朝飯をたべてから、始めて暖かい床にはいつてぐつすりと寢入るのである。私の村では、又夜になると、ところどころの家から藁を打つ槌の

響きが聞えて来る。氷切りなどに行かぬ人々が草鞋や雪沓を作るのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、重く、にぶく、底のない響きであり、聞いておれば、あるほど、物遠い感じがする。氷叩きの槌の音は、遠くて近く聞える。藁を打つ音は、近くて遠い感じがする。

私の村では、又、日中とところどころの家に機を織る音が聞える。町に行つて買ふ布よりも、絲を仕入れて染めて織る方が、安價で丈夫な布が得られるといふのである。縫ひ物をする女は、炬燵に居る。機を織る女は、それができない。それで、機臺は皆南向きの日當りのよい室に据ゑつけられる。冬枯れの木立に終日響く機の音は、寒いけれども、村を賑やかにする。どの家の機は、今日で何日目であるとか、どの家の機は何日かゝつて織り上つたとかいふやうなことを、女たちは皆音を聞いて知つてゐる。閑寂な村にあつて、隣保相依る心は、機の音までが同情の交流になるのである。

(久保田俊彦ノ文ニ據ル)

## 六 大君のへに

太平記

### 松の下露

さるほどに、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒はだしなる體にて、いづくをさすともなく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、初め一、二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供を申されたりけれ。雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々になつて、後には唯藤房季房二人よりほかは、主上の御手を

引きまゐらする人もなし。かたじけなくも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そのことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそ淺ましけれ。

いかにもして、夜のうちに赤坂の城へと、御心ばかりを盡くされけれども、かりにも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち留り、晝は道の傍らなる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草を御しとねとし、夜は、人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、御袖をほし敢へず。とかうして、夜晝三日に、山城の多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目に會ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに、うつゝの夢に臥し給

ふ。

梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し召して、木陰に立ち寄りさせ給ひたれば、下露のはらくと御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、

さしてゆく笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし

藤房卿涙を抑へて、

いかにせむたのむかけとて立ち寄ればなほ袖ぬらす松の

下露

院の莊

その頃備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上、隱岐國へ遷らせ給ふと聞きて、二心なき一族どもを集めて評定しけるは、

「志士仁人は生を求めて以つて仁を害することなし、身を殺して以つて仁を爲すことありといへり。義を見てせざるは勇なきなり。いざや、臨幸の路次に参り合ひ、君を迎へ奉りて大軍を起し、たとひ屍を戦場に曝すとも、名を子孫に傳へん」と申しければ、心ある一族ども、皆この議に同ず。さらば、路次の難所に相待ちて、その隙を窺ふべしとて、備前と播磨との境なる船坂山に隠れ伏し、今やくとぞ待ちたりける。

臨幸餘りに遅かりければ、人を走らせてこれを見するに、警固の武士、山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸なし奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば、美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らんとて、三石の山よりすぢかひに、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂に着きたりければ、主上はや院の莊へ入らせ給ひぬと申す。力なく、これより散りくになりけるが、せめても、この所存を上聞に達せばやと思ひ、微服潛行して時を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大きなる櫻の木もありけるを押し削りて、大文字に一句の詩をぞ書き附けたりける。

天莫レ空ニ勾ク踐シ 時非ズ無ニ范シ蠡シ

警固の武士ども朝もにこれを見つけて、何事をいかなる者が書きたるやらんとて、讀みかねて即ち上聞に達してけり。主上は、やがて詩の心を御覺りありて、龍顔殊に御快く笑ませ給ひぬ。

船上のみゆき

夜も既に明けければ、船人纜ともづなを解いて、順風に帆を揚げ、港の外に漕ぎ出す。船頭、主上の御有様を見奉りて、たゞ人にてはわたらせ

給はじとや思ひけん、屋形の前に畏まつて申しけるは、「かやうの時、御船を仕つて候こそ、われらが生涯の面目にて候へ。いづくの浦へ寄せよとも御誼に従ひて、御船の楫をば仕り候べし」と申し、まことに他事もなげなる氣色なり。六條少將忠顯朝臣、これを聞き給ひて、隠してはなか／＼悪しかりなると思はれければ、この船頭近く呼び寄せて、屋形の中に御座あるこそ、日本國の主かたじけなくも十善の君にていらせ給へ。汝らも定めて聞き及びぬらん。去年より隱岐判官が館に御座ありつるを、忠顯、行幸を請ひまゐらせたるなり。出雲伯耆の間に、いづくにてもさりぬべからんずる泊りへ、急ぎ御船を着けて、おろしまゐらせよ」と仰せられければ、船頭、まことにうれしげなる氣色にて、取楫、面楫取り合はせて、片帆かけてぞ馳せたりける。

今は海上二、三十里も過ぎぬらんと思ふところに、同じ追風に帆を掛けたる船十艘ばかり、出雲伯耆をさして馳せ來たり。筑紫船か、商人船かと思れば、さもあらで、隱岐判官清高、主上を追ひ奉る船にぞありける。船頭、これを見て、「かくてはかなひ候まじ。これに御隠れ候へ」と申し、主上と忠顯朝臣とを船底に宿しまゐらせ、水手楫取立ち並んで、櫓をぞ押したりける。

さるほどに、追手の船一艘、御座船に追つついて、屋形の中に入り、移り、こゝかしこ捜しけれども見出し奉らず、さては、この船には召されざりけり。もし、怪しき船や通りつる。と問ひければ、船頭、「今夜の子の刻ばかりに、千波の港を出て候ひつる船にこそ、京上臈かと思ひ、冠とやらん着たる人と、立烏帽子着たる人と、二人乗らせ給ひて候ひつれ。その船、今は五、六里も先立ち候ひぬらん」と申し

ければ「さては、疑ひもなきことなり。はや、船を押せ。」とて、帆を引き、梶を直せば、この船はやがて隔たりぬ。さてこそ、主上は虎口を御遁れあつて、御船は時の間に、伯耆國、名和の港に着きにけり。

六條少將忠顯朝臣、一人先づ船より下り給ひて、「この邊には、いかなる者か弓矢取りて人に知られたる。」と問はれければ、道行く人立ちやすらひて、「名和又太郎長年と申す者こそ、その身、さして名ある武士には候はねども、家富み、一族廣うして、心ある者にて候へ。」とぞ語りける。忠顯朝臣、よくく、その子細を尋ね聞きて、やがて勅使を立てて仰せられけるは、「主上、隱岐判官が館を御遁れあつて、今この港に御座あり。長年が武勇、上聞に達せし間、御頼みあるべき由を仰せ出さるゝなり。頼まれまゐらせ候べしや、否や。速かに勅答申すべし。」とぞ仰せられたりける。

名和又太郎は、折節一族ども呼び集めてみたりけるが、舍弟小太郎左衛門尉長重進み出でて申しけるは、「われら、かたじけなくも十善の君に頼まれまゐらせて、屍を軍門に曝すとも、名を後代に残さんこと、生前の思ひ出、死後の名譽たるべし。唯一筋に思ひ定めさせ給ふより、ほかの儀あるべしとも存じ候はず。」と申しければ、又太郎を始めとして、當座に候ひける二十餘人、皆この議に同じけり。「さらば、やがて合戦の用意候べし。定めて、追手も後よりかゝり候らん。長重は、主上の御迎へに參つて、すぐに船上山へ入れまゐらせん。方々は、やがて打ち立つて、船上へ御參り候べし。」と言ひ捨て、鎧一縮して走り出でければ、一族五人、腹巻取つて投げ掛け、皆高紐締め、共に御迎へにぞ參じける。

俄かの事にて、御輿などもなかりければ、長重、着たる鎧の上に荒

薦すすを巻いて、主上を負ひまゐらせ、鳥の飛ぶが如くにして、船上へ入  
 れ奉る。長年、近邊の在家に人を廻し、思ひ立つ事ありて、船上に兵  
 糧を揚ぐるあることあり。わが倉の内にあるところの米穀を、一荷持  
 ちて運びたらん者には、錢を五百づつ取らすべし。と、觸れたりける  
 間、十方より人夫五、六千人出で來たりて、われ劣らじと持ち送る。  
 一日がうちに、兵糧五千餘石運びけり。その後、家中の財寶悉く人  
 民百姓に與へて、己が館に火をかけ、その勢百五十騎にて船上に馳  
 せ參り、皇居を警固仕る。

長年が一族名和七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布五  
 百反たありけるを旗にこしらへ、松の葉を焼いて煙にふすべ、近國の  
 武士どもの家々の紋を書いて、こゝの木のもと、かしこの峯にぞ立  
 ておきける。この旗ども、峯の嵐に吹かれて、陣々に飜りけるさま、

山中に大勢充滿したりと見えておびたゞし。

七 眞賢木

神代より 根絶えぬ榊

わが庭に 移し植うれば、

つや々けく 鏡なす葉は、

天つ日の 光を承うく。

露霜は 置くといへども、

榊葉の 變らぬ色は、

神かけて 萬代までも、

人の世に 示したまへり。

殿造り みつばよつばに、  
 輝ける 宮居ならねど、  
 丘の上 芝生に立てる、  
 わが家にも 神おはします。

眞賢木の 朝清らに、  
 神々も いざみそなはせ。  
 眞賢木の 夕べ静かに、  
 神々も いざ、知ろしめせ。

(河井又平ノ作ニ據ル)

八 士 風

駿臺雑話

鎧の着ぞめ

徳川秀康越前に封せられし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を厚祿にて召し抱へけり。又、狛伊勢とて、これも國にて世祿の歴歴なりしが、嫡子に鎧の着ぞめさせけるに、かの掃部を招待しつづ、子に鎧着することを頼みけり。

さて、饗膳すみ、祝ひの杯に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の着ぞめに候まゝ、御身の御武功の事御物語り候うて、かれに御聞かせ候へ。」と言ひしに、掃部「いや、それがしが身の上に御話し申すべきほどの武功は覺え申さず候。されど、御望みももだしがたく候まゝ、それがし一生のうちに、武者ぶりのみごとなる士を一人見申して



候。その事を話し申すべし。江州賤嶽しづたけの戦に、暮れ方にそれがし一騎余吾よごの湖うみのわたりを引き候ひしに、敵と覺しくて、後より言葉をかけし故、馬を引き返し候へば、その人申し候は、「今朝よりかせぎ候へども、よき敵に會ひ申さず候。御人體を見受け、幸ひとこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし。」とて進み寄り候故、「それこそ、あなたも望むところにて候へ。」とて、互に馬を乗り離し、既に槍を合はせんとしけるに、その人、「しばし御待ち候へ。今朝より雑兵を多く突き崩し候故、槍よごれて候まゝ、槍を洗ひ候うて、御相手になり候はん。」とて、余吾の湖に槍を打ち浸し、二、三べん洗ひつゝ、「さらば。」とて、突き合ひしが、久しく勝負なかりしほどに、日も暮れ果てて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたよりまた言葉をかけ、「もはや、槍先も見えず候。御残り多くは候へども、これまでに

て候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。それがしは青木新兵衛と申す者にて候。」とて、それがしが名をも承り候うて、「この後、また陣頭にて出で會ひ候はば、互に入手にはかゝり申すまじく候。もし又、味方にて候はば、わりなく入魂いこん致し候べし。さらば。」とて立ち別れしが、これほどみごととなる武士は遂に見侍らず。いかなり果て候にや。」と語りけり。

その頃、伊勢が許へ心安く出入りする青木方齋かさいといふ浪士あり。その日も来て、勝手に居たりしが、この物語を聞き、勝手よりにじり出でつゝ、掃部に向かひて、「さても唯今の御物語承り、今更昔を思ひ涙を落してこそ候へ。その時の御相手になり候青木新兵衛は、恥づかしながらわれらにて候。かく申すばかりにては、浮きたる事に覺すべく候。」とて、その時の雙方の鎧よろいの緘せき、馬の毛色を一々言ひ

けるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ、さてく、久しくて會ひ候うて本望に候。とて、手前にありし杯を方齋にさし、これをするしに。とて、腰の脇指を抜いて引きけり。それより方齋が名國に高くなりしほどに、秀康の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召し出されけるとぞ。

## 清風高義

渡邊競は、源三位入道頼政が所従の士には第一の者なり。然るに、治承年中、頼政、兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打ち忘れてやありけん、競にかくと知らせざりしほどに、競暫く猶豫して家に在りしを、平宗盛聞きて、日頃競が魁偉なるを見て、己が所従にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば、請ふべきやうもなかりしに、このたび競一人都に残りしと聞きて、六波

羅に參れ。と人して言はせければ、參りけり。宗盛對面して、汝、今よりわれに仕へば、入道の恩にはまさるべし。とて、小糟毛といふ馬に貝鞍置き、乗り替への料とて、遠山といふ馬を引き添へ、黒絲緘の鎧冑まで皆具してたびけり。競、畏まり賜はりて、ほくそ笑ひして罷り歸りぬ。一族家人打ち寄りて、入道殿これほどの大事を思ひ立ち給ふに、一人取り残されしは、眞實に遺恨なり。大將のかくうちたえ語らひ給ふはいなみがたし。『時の花をかざしにせよ。』といふこともあれば、唯このまゝにてあれかし。と言ふを、競、いやとよ、勇士の義さはあらず。とて、宗盛よりたびける鎧着て、小糟毛に乗り、郎等七騎打ち連れて、三井寺へとて打ち出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬に乗りながら門の内へのぞきつゝ、高聲に言ひ入れけるは、競こそ唯今下し賜はりし馬に乗り、三井寺へ罷り越し候へ。御眷

頼を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、このたび死を共に致すにて候。御門前を空しく打ち過ぎんは本意なく候へば、御暇を申し候。とて、三井寺に到り、頼政と一所いっしょになりしが、その後、宇治橋の合戦にいさぎよく討死してけり。

彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に捕らはれしを、頼盛の母老尼清盛に請ひて死を救ひけり。その時、宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問つうもんして、疎意なき由を言はせけるほどに、頼盛一人一門にそむきて都に留りけり。

その後、平家未だ亡びずして西海に在りし時、頼朝舊恩を謝せんために、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召し具せらるべき由を言ひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いさ連れて下

らん。」と言ひしに、宗清言ひけるは、「頼朝、それがしに下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとのことにてあるべく候。今更源氏にへつらひて、その陰により候はんは、西海に在る朋友どもの承るところもくちをしくこそ候へ。君はかくて都に御安堵おんあんどうしおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るもいたはしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝それがしが事を尋ねられ候はば、折節いたはる事ある由を仰せられて給はり候へ。」とて、鎌倉へは行かざりけり。その後、西海へ下りけるにや、その終りを知らず。

伊東祐清は、伊東祐親が第二子なり。頼朝、伊豆に流謫りゅうたつの時、祐親によりておはせしが、後、祐親事によりて頼朝を害せんとするを、祐

清悲しみ、頼朝を深く愛護し、ひそかに遁れ去らしむ。

その後、頼朝兵を起して伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家の味方として、大庭景親らと石橋山に到りて、頼朝を追ひ襲ひけり。その後、頼朝既に東國を平定し、みづから大兵を率ゐて駿河に到りし時、祐親を生け捕りて到りしを、その罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預け、祐清を召し出して、勸賞を行なはんとありしに、祐清「唯、御恩には、早く殺され候へ。父捕らはれ、その子勸賞せらるゝ法や候。もし、われを殺し給はずば、平家に歸すべし」と言ふに、「さればとて、われを救ひし者を殺すべきやうなし」とて許して放ちやりけり。祐清、それより直ぐに京師に奔りて平家に屬し、後、篠原の合戦に遂に討死を遂げけり。

この三人時代も大方同じく、志節も相似たり。その清風高義源

平の間に求むるにその類ひ少く覺え侍る。

祕事は睫

或る大藩の主に刃物の目利きに長じたるありしが、或る時、無銘の古き刀を見て、「これは相州の正宗なり」とて本阿彌に見せられけるに、本阿彌うけがはず、「これは志津と見えて候。なか／＼正宗にてはなく候。」と言へば、「いやとよ、正宗なるぞ。汝に預けおくなり。より／＼研ぎてみよ。いつにても正宗になりたる時に返し候へ。」とありしほどに、心得がたき事に覺えけれど、取りて家に歸りて屢、研ぎてみるに、志津に似たる焼刃は見ゆれども、正宗とは見えず。かくて年経るほどに、右の主君も失せられしが、二代になりて、本阿彌、右の刀を持參して、「御預けの刀果して正宗になりて候。今更、先君御目利きの強きにいづれも驚きて候。」と言へば、家老どもその子

細を問ひけるに、本阿彌「これは不思議に、さる男の後生ばなしにて、正宗になりて候。日頃、それがしが家に心安く出入り致し候老人あり。常に念誦うちして後生を願ひ候ひしが、或る時に來て、「われらこのほどは、後生の願ひやうを變へ侍る。唯今までの願ひやうこそ悪しく覺え候へ。この荒凡夫の身として、俄かに佛にならんと願へばとて、佛になられ候べきか。佛にならんとならば、先づよき人にならんと願ふべし。よき人になりて後、佛を願はば、佛になるに便りあるべし。」と語りしを承りて、これはもつともなることこそ。かの刀も直ぐに正宗の焼刃にせんと研ぐほどに、却つて正宗にならざるにてあらん。それより近き志津にしてみばやと存じ候うて、志津の焼刃を志して研ぎ候へば、やがて正宗に似より候ほどに、さてこそと存じ、いよゝ心に入れて研ぎ上げ候へば、今は

確かに正宗になりて候。」と言ひしとなり。正宗の焼刃には目を着けずして、その刀の身に應じたる志津を志して研ぎしほどに、遂に正宗にはなりたり。

この物語を聞きておもしろき事に思ひしが、その後、さる酒盛りの座にて、二人、杯の先後を互に辭退しけるに、一人の若き士、御年にあやかり候やうに御杯を賜はり候へ。」と言ふに、その相手の人、われらが年もそこと餘り違ひ候まじ。御あやかりありたきほどの年にてもなく候。と言ふに、その時若き士、その事にて候。大きに違ひ候うては、急にあやかり申すべき思ひよりもなく候。先づ少しの御年だかにあやかりまゐらせて、それより齡を重ねばやとこそ願ひ候へ。」と言ふにぞ、相手道理に負けて杯をさしけり。

言へば當座のはかなき物語のやうなれども、よく思へばまこと

に祕事は睫まげにてこそ侍れ。もとより學は道を目當てにすることにては侍れども、唯、目ばかり高あがりして身のほどをも省みずしては、道といよ／＼遠くなりつゝ、一生自得することなくしてやみなん。

## 九 馴鹿橋

一月の或る日の朝、樺太かほたの國境近いこの町では、氣温が零下三十度近くまで下つた。

今日は敷香ふかの近郊にあるヤクートの天幕をおとづれることになつてゐる。

七時三十分發の一番列車に乗るために、私たちは六時に起きた。外はまだ眞暗で、漸く東の空が青磁色に明かるみを帯び、星がきらきらと輝いてゐた。黒い冬枯れの立ち木には霜が眞白におりてゐた。

樺太のこの附近の汽車は、冬は定時に出ることは殆どないので、一應宿から驛へ電話で聞いてもらつた。おくれるかどうかまだわからないといふ返事である。それでは、とにかく定時に停車場まで行つてみようといふので、重い毛皮の外套を邪魔にしながら、やつと駆けつけた。すると驚いたことには、「一番運休」と書いた小さい黒板が出札口に掛つてゐた。

二番列車は十一時三十分である。それまではどうにもしやうがないので、神妙に待つことにした。しかし、午前中待ちあぐんでも、汽車は來ない。漸く十二時半になつて、その二番列車が白い蒸氣を吐きながら、息も絶え／＼の姿ではいつて來た。

すつかり豫定をおくらせて、やつと敷香の驛へ着いた。さうして出迎への人が馴鹿の橇と犬橇とを用意して待つてをられるのを見た時は、やれ〜と安心した。

敷香の町でも、馴鹿橇や犬橇は非常に珍しく、この出迎へは特別の好意によるものなのである。

驛前の廣場は、邊境の新しい町に特有な、廣い道路と背の低い家とから成る荒涼とした景色である。いろ〜な毛皮だの毛布だのをまとつて着ぶくれた人たちの中に、馴鹿があの大いりつばな角を振り立ててゐた。

馴鹿橇も犬橇も、橇は細い木を杵型きねがたに組んだ極めて簡単なもので、馴鹿の方は二頭立てになつてをり、犬橇は六頭が長い繩に一列に繋がれてゐた。兩方とも四人ぐらゐは乗れるもので、オロッコ

の青年がそれ〜御者の役目をつとめてくれた。二人ともまじめさうな好青年であつた。

毛むくじやらの樺太犬は、恐しく元氣がよい。少しもじつとはしてゐないで、直ぐ引き繩をもつれさせてしまふ。それで、御者のオロッコ青年は始終犬を叱つてゐなければならなかつた。それだけに、一度走り出すと、犬橇の方は大變な速力であつた。

風がなく、比較的凌ぎやすい日ではあつたが、もう日が大分傾いたので、氣温は零下二十度をちよつと下つてゐた。吹きさらしの橇の上のこととて、寒さは骨にこたへるくらゐであつた。

町を出て、海岸に沿つて暫く走り、いよ〜ツンドラ地帯のから松の疎林にはいつた。このツンドラ地帯にはいると、今までは速歩はやあしで少しおくれ馳せについて來た馴鹿の橇が急に元氣になつた。

私たちは馴鹿橋の方へ移つた。

眞冬のツンドラ地帯には、晩秋のあのゴブラン織のやうな美しい色調の名残りも見られない。葉の落ちたから松も、雪の切れ間にところどころ見える灌木の叢も、唯一色に黒く、雪だけが灰色に寒く凍つてゐる。馴鹿は、その中に踏みつけられたでこぼこの細い道を、元氣よく走つて行く。かういふ人界から縁の遠い境地へ来ると、あの奇怪な形の大きい角が、ちつとも不自然には見え、いかにも周囲の景色とよく調和してゐるやうな氣がする。

馴鹿の蹄は指ごとに着いてゐて、踏んだ時は趾が廣がるので、深い雪の中を走る時には、かんじきを穿いたやうになるのださうである。それが、足を上げた時には、つぼまるので、蹄の觸れ合ふ音が、ばつくと軽い響きを立てる。周囲には何の音もないこの凍土

の地帯では、人間も寒さに身をこゝらせて、黙つてこの馴鹿の蹄の音に聞き入るばかりである。

から松の林がとぎれて、少し開けた所に、ヤクートの一家の天幕があつた。この一家の人たちは、馴鹿の飼育をしながら、昔シベリヤの奥地で營んでゐたまゝの生活をしてゐるのである。イワン、ペトロウイチ老人と老婆、それに二十五、六歳に見える娘と、五歳ぐらゐの男の子とが、一つ天幕の中に住んでゐた。樺太でも、かういふ昔ながらの生活をしてゐる舊土人は殆ど居ない。この一家だけが、二年ぐらゐ前からかういふ生活をしてゐるのださうである。

馴鹿の繁殖が問題になつて来て以来、舊土人にバラック建ての粗末な日本風の家を、たくさん建ててやつたといふことである。



この試みはいろいろの意味で興味深いものがあつた。

天幕は一重の木綿で、眞四角な八疊間より少し廣いくらゐの簡單なものである。老人の話では、レナ河流域に居た頃にもつてゐたものの由で、それがちつとも傷んでゐないのが不思議であつた。かういふ一重の天幕一枚で、零下四十度近くにも下る樺太の嚴冬を凌いでゐることが、一番意外であつた。日中は薪ストーブを焚いて暖を取り、夜は馴鹿の皮で嚴寒を防いでゐるものらしい。

天幕の中には床はなく、ツンドラの上にとゞ松の青葉を五寸ばかりの厚さに一ばい敷き詰めたものが床になつてゐた。その上に莫塵を敷いて生活してゐるのである。眞中だけ一坪近く土が出てゐて、その中にストーブが備へつけてある。その煙突を天幕の横へ斜めに出し、吹雪の時には、その先端に曲りをつけて、風向き

によつて回轉させるのださうである。さういふ長い間の經驗から得られた科學的な生活法によつて、この人たちは嚴しい自然の中で元氣に生きてゐるのである。

私たちのおとづれた時も、外は零下二十度五分の寒さなのに、この天幕の中は常溫近く、十三度にも暖められてゐた。薪さへ十分に焚けば、この程度の温度は天幕一枚でも保ち得るので、その點では、石炭をどんく焚いて、やつと室内の温度を保つてゐるわれわれの北國生活は、このヤクトの原始生活と餘り變りはないのである。

とゞ松の青葉を敷き詰めた床は清潔な感じがした。さうして、この青葉は一週間ごとぐらゐに新しい葉と取り代へるので、事實非常に清潔な生活なのである。とゞ松の脂たぐの匂ひはすがくし

かつた。かういふ原始的でしかも清潔な生活は、非常に珍しい感じがする。それは寒さの恩恵によるところが多いのであらう。とゞ松の青葉の床にすわり、果てしないツンドラの曠原を眺めてみると、都會生活といふものを、全く離れた氣持で見直すことができた。

天幕の中の座席や、いろ／＼な道具類の置き場所は、それ／＼嚴重にきまつてゐるのださうである。鐵砲の置き場所、主人の席、客席などには、信仰的に嚴重な掟がある。かういふ狭い一部屋の中で、一家族が永く住むためには、さういふ掟が必然的に生じて來るのであらう。

夜具は、現在は日本の蒲團かぶとを使つてゐて、それをきちんと疊んで、天幕の一隅に積んであつた。娘は内地人の生活を経験したことがあるので、疊の生活を望んでゐるが、老人たちはこの天幕生活を喜んでゐるといふことであつた。

一時間ばかりその天幕の中で過し、シベリヤ以來の習慣の紅茶を何杯も御馳走になつて、馴鹿の話聞いた。さうして、この人たちの衣食住が全く馴鹿に依存してゐることを知り、今更のやうに、人間と環境との密接な繋がりに驚きの念を深くした。

歸途に就いた時には、短い冬の日も、もう夕闇が濃く迫つてゐた。日が落ちると、馴鹿櫓の上では、風が文字通りに身を切るやうに感ぜられた。みんなはからだを石のやうにして、馴鹿の蹄がばつばつと響くのを唯一の心頼みに、敷香の町の灯が早く見えるやうにと願つてゐた。

(中谷宇吉郎ノ文ニ據ル)

## 十 創始者の苦心

蘭學事始

小塚原に腑分けを見たりし翌日、良澤が宅に集り、前日の事を語り合ひ、先づ「タブレアナトミケ」の書に打ち向かひしに、まことに艱難なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれてゐたるまでなり。されども、良澤はかねてよりこの事を心にかけて、長崎までも行き、蘭語並びに章句語脈の間のことも少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齡も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁は未だ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。

さて、この書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひ

しに、「とても、初めより内象のことは知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象のことなり。その名處は皆知れたることなれば、その圖と説の符號を合はせ考ふることは、取り附きやすかるべし。圖の始めとはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り始むべし」と定めたり。即ち、解體新書形體名目篇これなり。その頃は、助語の類もいづれが何やら心に落ち着きて辨へぬこと故少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬことばかりなり。例へば「眉といふものは目の上に生じたる毛なり」といふやうなる一句、髻鬚として、永き日の春の一日には明らめられず、日暮るゝまで考へつめ、互ににらみ合ひて、僅か一、二寸の文章一行も解し得ざるほどにてありしなり。

又、或る日、鼻のところにて「フルヘツヘンドせしものなり」とある

に至りしに、この語わからず。これはいかなる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。その頃、辭書といふものなし。漸く長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘツヘンド」の譯注に、「木の枝を斷ちたる跡、その跡フルヘツヘンドをなし、又庭を掃除すれば、その塵土集りフルヘツヘンドす」といふやうに讀み出せり。これはいかなる意味なるべきかと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へかねたり。時に翁、思ふに、木の枝を切りたる跡、癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集れば、これも堆くなるなり。鼻は面中にありて堆起せるものをれば、「フルヘツヘンド」は「堆し」といふことなるべし。然れば、この語は「堆し」と譯してはいかん」と言ひければ、各、これを聞きて、甚だもつともなり。「堆し」と譯さば適當すべし」と決定せり。その時のうれしさ

は、何に譬へん方もなく、連城の壁をも得し心地せり。

かくの如きことにて、推して譯語を定めたり。その數も次第次第に増し行くこととなり、良澤の既に覚えぬし譯語書留をも増補しけるなり。その中にも、「シンネン」などいへること出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりき。これらは又、行く行くは解くべき時も出で來ぬべし。先づ符號を附けおくべしとて、丸の中に十文字を引きて記しおきたり。その頃知らざることば「響十文字」と名づけたり。毎會いろくに申し合はせ、考へ案じても、解すべからざることあれば、その苦しきの餘り、それもまた「響十文字」「響十文字」と申したりき。然れども、なすべき事はもとより人にあり、成るべきは天にあり。「の譬への如くなるべし」と、かくの如く思ひを勞し、精をすり、辛苦せしこと一箇月に六、七回なり。そ

の定日は怠りなく、わけもなくして各相集り、會議して讀み合ひしに、實に「不味者は心」とやらにて凡そ一年餘りも過しぬれば、譯語も漸く増し、讀むに従ひ、自然とかの國の事態も了解するやうにて、後はその章句のあらし所は、一日に十行も、その餘も、格別の勞苦なく解し得るやうにもなりたり。もつとも毎春參向の通詞どもへも聞きたゞせしこともあり。又、その間には解屍のこともあり、獸畜を解きて見合はせしこともたび／＼なりき。

この會業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人も相加里寄りつどふことなりしが、各志すところありて、一樣ならず。翁は一たびかの國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知り、明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日も早くこの一部を用立つやうになし、みたり。

と志を起せしこと故、他に望むところもなく、一日會して解するところは、その夜翻譯して草稿を立て、それに就きては、その譯述の仕方を種々さまざまに考へ直せしこと、四年の間に、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すに至り、遂に解體新書翻譯の業成就したり。

そも／＼江戸にてこの學を創業して、腑分けと言ひ古りしことを新たに解體と譯名し、且つ社中にて誰言ふとなく蘭學といへる新名を首唱し、わが日本國中の通稱ともなるに至れり。これ今時の隆盛を致せし嚆矢なり。今を以つて考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの醫書を譯すといふことは絶えてなかりしが、この時の創業、不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書にて、これが醫書新譯の起始となりし

は不用意を以つて得しところにて實に天意とやいふべき。

## 十一 尊徳先生の幼時

先生、姓は平、名は尊徳、通稱金次郎、その先、曾我氏に出づ。二宮はその氏なり。同じく二宮と稱する者、相模國柏山村に總べて八戸あり。皆その氏族なりといふ。父は二宮利右衛門、母は曾我別所村、川窪某の女なり。祖父銀右衛門、常に節儉を守り、家業に力を盡くし、頗る富有を致せり。父利右衛門の世に至り、邑人皆これを善人と稱す。民の求めに應じて、或は施し、或は賑貸し、數年にして家産を減じ、積財悉く散じ、衰貧既に極まる。然りといへども、その貧苦に安んじ、敢へて昔日施貸の報を思はず。この時に當つて、先生生まる。實に、天明七年七月二十三日なり。次子を三郎左衛門、末

を富次郎といふ。父母貧苦のうちに三男子を養育し、その艱苦、言語の盡くすべきにあらず。

寛政三年、先生五歳、酒匂川洪水し、大口の堤を破り、數箇村流亡す。この時、利右衛門の田圃、一畝も残らず、悉く石河原となる。もとより赤貧、加ふるにこの水害に罹り、艱難いよゝゝ迫り、三子を養ふに心力を勞すること限りなし。先生終身、言この事に及べば、必ず涕泣して、父母の大恩無量なることを言ふ。聞く者皆これがために涙を流せり。

某年、父病に罹り、極貧にして藥餌の料に當つべき物なし。止むを得ず、田地をひさぎて、金貳兩を得たり。利右衛門、疾治して歎じて曰く、貧富は時にして免れがたしといへども、田地は祖先の田地なり。わが治病のためにこれを減ずること、豈不孝の罪を免れん

や。然りといへども、醫藥その價を謝せずんばあるべからず。」と大息して醫に行き、貳兩を出し、その勞を謝す。醫師某、眉をひそめて曰く、「子の家極めて貧なり。何を以つてかこの價を得たる。」利右衛門答へて曰く、「まことに予が赤貧なる、子の言の如し。家貧なるがために治療の恩を謝せずんば、何を以つてか世に立たんや。子、これを問ふに實を以つて告げずんば、子の意もまた安からざらん。貧困極まれりといへども、未だ些少の田地あり、これをひさぎて以つて謝せり。子、勞することなかれ。」醫師愀然として涙を流して曰く、「子、子の謝を得ずといへども、飢渴に及ばず。子、家田を失ひて一旦の義を立て、後日何を以つて妻子を養はん。子、子の病を治め、却つてその艱苦を増すを見るに忍びんや。速かにその金を以つて田地を償ひ、予に報ずるを以つて勞することなかれ。」利右衛門

許さず。醫曰く、「子、辭することなかれ。貧富は車の如し。子、今貧なりといへども、いづくんぞ富時なきを知らん。もし家富むの時に至り、この謝をなさば、予も快くこれを受けん。何の子細かあらんや。」と。

こゝに於いて、利右衛門大いに感じ、三拜してその言に従ひ、強ひてその半金を以つて謝とし、その半金を持ちて歸る。先生、父病後の歩行を案じ、その歸路の遅きを憂ひ、門に出でてこれを待つ。利右衛門、醫の義言を喜び、兩手を舞して歩行す。先生迎へて曰く、「何の故に喜び給ふことかくの如くなるや。」父曰く、「醫の慈言かくの如し。われ汝らを養育することを得たり。これを以つて喜びに堪へず。」と。

父、酒を好み。先生、幼にして草鞋を作り、日々一合の酒を求め

て夜々これをすゝむ。父その孝志を喜ぶこと限りなし。

寛政十二年、先生年十四、父利右衛門大いに病みて、日々に衰弱す。母子これを歎き、晝夜看病怠らず。家産を盡くしてその治を求め、鬼神に祈りて誠精を盡くせり。然れども命なるかな、遂に同年九月二十六日歿す。母子の悲歎、哭甚だしく、邑人皆これがために涕泣せり。母、三子を養育するに艱難いよく、極まれり。母、先生に言つて曰く、汝と三郎左衛門とは、われいかやうにも養ひ遂げん。末子までは力に及ばず。三子共に養はんとせば、皆共に飢ゑんのみ」と。

こゝに於いて、末子を携へ、縁者某に行きて慈愛を請ふ。某、その託を受けてこれを養ふ。母、喜びて家に歸り、二子に告げて共に艱苦を凌がんとす。然るに、母寝ねて徹夜寝ぬること能はず。毎夜

流涕枕をうるほす。先生怪しみて問うて曰く、「毎夜寝ね給はず、何の故なるや。」母曰く、「末子を縁家に託せしより、わが乳張り、痛苦のために寝ぬること能はず。數日を経ばこの憂ひなからん。汝、勞することなかれ。」と。言終らざるに、涙潜々たり。先生、その慈愛の深きを察し、泣いて曰く、「前には母君の命に従ひ、末子を他に託せり。案ずるに、赤子一人ありとも何ほどの艱苦を増さん。明日より、それがし山に行き薪を伐り、これをひさぎて末子の養育をなさん。速かにかれをもどし給へ。」と。母、この言を聞き、大いに喜び、「汝、しか言ふはまことに幸ひなり。今より直ちにかの家にとり、もどし來たらん。」と、速かに起ちて行かんとす。先生、これを止めて曰く、「夜、今、子に及べり。夜明けなば、予行きて抱き來たらん。夜半の往返は止り給ふべし。」母曰く、「汝、幼若なほ末弟を養はんといふ。夜半の



往返何を以つていとはんや」と袖を拂つて隣村の縁家に到り、旨趣を告げて、末子を抱き家に歸り、母子四人共に喜ぶこと限りなし。

これより、鷄鳴に起きて遠山に到り、或は柴を刈り、或は薪を伐りてこれをひさぎ、夜は繩をなひ、草鞋を作り、寸陰を惜しみ、身を勞し、心を盡くして母の心を安んじ、二弟を養ふことにのみ苦勞せり。而して採薪の往返にも大學の書を懷にし、途中歩みながらこれを誦して少しも怠らず。これ、先生聖賢の道を學ぶの初めなり。道路、高音にこれを誦讀するが故に、人々怪しみ、狂兒を以つてこれを目する者あり。

酒匂川、その源富嶽のもとより流出し、數十里を經、小田原に到りて海に達す。急流激波、洪水ごとに砂石を流し、堤防を破り、やゝもすれば田面を押し流し、民家を毀つに至る。年々、川除け堤の土功

止まず。故に、邑民毎戸一人づつを出して、この役に當らしむ。先生、年十二よりこの役に出で、以つて勤む。然れども、年幼にして力一人の役に當るに足らず。天を仰ぎ歎じて曰く、「われ、力足らずして一家の勤めに當るに足らず。願はくは、速かに成人ならしめ給へ」と。又、家に歸りて思へらく、「人わが孤にして貧なるを憐愍し、一人の役に當つといへども、わが心に於いて何ぞ安んずることを得んや。徒らに力の不足を憂ふるも詮なし。他の勞を以つてこれを補はずんばあるべからず」と。こゝに於いて、夜半に至るまで草鞋を作り、翌未明、人に先立ちてその場に到り、人々に言つて曰く、「予、若年にして一人の役に足らず、他の力を借りてこれを勤む。その恩を報ずるの道を求むれども得ず。寸志なりといへども、草鞋を作りて持ち來たれり。日々わが力の不足を補ふ人に答へん」と言

ふ。衆人、その志の常ならざるを賞し、これを愛し、その草鞋を受けて、その力を助く。役夫休めども休まず、終日孳々として勤む。この故に、幼年なりといへども、土石を運ぶこと、却つて衆人の右に出づ。人皆これを感じず。

享和二年、先生年十六、母病に罹り、日々に重る。先生、大いにこれを歎き、天に祈り、地に祈り、心力を盡くして、その治を求め、日夜帶を解かず、その側を離れず、看病手を盡くせり。然れども、その驗あらずして、病むこと十有餘日にして死す。先生、慟哭悲痛、殆ど身をそこなはんとするが如し。家財既に盡き、田地もまた悉く他の有となる。残れるもの、徒らに空屋のみ。二弟を撫して、悲泣なすところを知らず。親族議して曰く、「三男子幼にして養育する者なし。このまゝ、家にあらば、何を以つてその飢渴を凌がん。親族に託し

て後年を待つにはしかず」と。近親萬兵衛なる者、先生を家に招きてこれを養ひ、第三郎左衛門と末子とは、曾我別所村川窪某これを養ふ。

これより先、先生十四歳の時、隣村飯泉村觀世音に參拜し、堂下に坐して念ずることあり。忽然として行脚の僧來たり、堂前に坐して讀經す。その聲微妙、その經深理廣大、一聞了然として、意中歡喜に堪へず。誦經既に終る。謹みて僧に問うて曰く、「今誦するところの經は何の經ぞ。」僧答へて曰く、「觀音經なり。」曰く、「予嘗つて屢これを聞けり。而して今聞くところに異なり。何ぞ予が心に徹することの明らかなるや。」答へて曰く、「世の誦するところは吳音なり。今、國音を以つて轉讀せり。これ、子の解するゆゑんか。」と。先生懷中を探り、錢二百を奉じて曰く、「願はくは寸志を呈せん、今一

たび誦讀し給へ。」と。僧その志を感じ、轉讀以前の如し。讀み終つて去る。その行く所を知らず。先生胸中豁然として大いに喜び、柏山村善榮寺に到り、和尚に謁して曰く、「大なるかな、觀音經の功德。その理廣大無量、その意云々。」と説解流水の如し。和尚大いに驚きて曰く、「予既に耳順を超えたり。多年この經を誦すること幾百千べん、未だその深理を解すること能はず。然るに、子若年、一たび讀誦を聽いて無量の深理を明解す。あゝ、これいはゆる菩薩の再來か。今、野僧この寺を退くべし。子願はくは僧となり、衆生のため、にこの寺に住し、大いに濟度の道を行なひ給へ。」と言ふ。先生固辭して曰く、「これ予の望むところにあらず。予は祖先の家を興し、その靈を安んぜんとす。志すところ出家にあらず。」と言ひて去る。これより後、いよゝ佛意も諸人を齊ひ安んずるより大なるもの

なきことを了知せりといふ。

(富田高慶ノ文ニ據ル)

昭和十九年八月十八日印刷  
昭和十九年八月二十二日發行  
昭和十九年八月二十二日翻刻印刷  
昭和十九年八月三十日翻刻發行

中等國文二

定價金三十四錢

著作權所有

著作  
者兼  
發行

文  
部  
省

翻  
行  
者

東京都神田區岩本町三番地  
中等學校教科書株式會社  
代表者 山本慶治

印  
刷  
者

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
大日本印刷株式會社  
代表者 佐久間長吉郎

昭和十九年八月二十三日  
文部省檢査濟



發  
行  
所

中等學校教科書株式會社

教科書番號 11ノ二

Englich brooch  
N. Yamawa

木子市 法勝寺所

米子市 西福系

鳥取藩

東山寺

大番 一年

広島大学図書

2000041406



Yamawa